
ロボットと少女

中条 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボットと少女

【Zコード】

Z3387BA

【作者名】

中条 剛

【あらすじ】

だいぶ前に、友人と対抗して『Word1ページ分の小説を書く』というのをやりました。結局それが日の目を見ないまま1年経ち、そろそろ投稿してみようと思いました。ぜひご覧いただけると嬉しいです。

「そろそろかな」

私は時計を見てスイッチを押した。同時に開く鉄の扉。私は無意識のうちに心が高鳴っていた。

今日は『あの人』に会うことができる。ただその思いだけが、私の心を高鳴らせる。

ここは高い高層ビル。この星で一番高いビル。私はそつと右手で『101』と書かれたボタンを押す。

がくん、とその鉄の塊は動き始める。先人はこれを『エレベーター』と呼んだそうだが、今はそれを確かめるすべはない。

この星は一〇〇〇年も前に業火によつて滅ぼされた『らしい』。さつきと同様、それを確かめるすべがないのだ。

この星で栄華を極めていた生物はその業火で滅ぼされたと聞く。しかし、私はそうでない、と思う。何千年もこの星に住んでいたのだから、どこかにいるのではないか、とも思った。

しかし、それを裏付ける、証拠なんてない。

その鉄の塊が目的の階に着いたのを知らせるベルが鳴つたのは、その時だった。

私は左手に持つ、お馳走になつていた小さな紙袋を右手に抱えなおし、外に出た。

そのビルの101階はとても静かだった。

エレベーターホールには大きな火の玉を中心に水、金、水と土が大地と海のように分かれているもの、火、木の枝、土で構成されている、そして同じような三つの玉 これだけはどの物質でできているかは特定できなかつた が置かれていた。まるでこの星が含まれる惑星系を作るかのように。

私がいる星は、その中の、火の球から数えて二番目の玉らしい。

その球にはバツ印がついていた。それは我々が侵略した証をさして、我々は侵略したのちこのオブジェを建て、自分たちが侵略した星を忘れないためにバツ印をつけるのだ、と偉いお方に習つた記憶がある。

私はそれを横目で見やり、左に進んだ。いろいろなドアがあつたが、何も見ず、ただ一心に一番奥の部屋に向かつた。

まず、一度ノック。するとすぐさま返事が返つてきた。

「失礼します」

私は小さく、低い声で言つて もしかしたら声は震えていたかも知れないが 中に入つた。

中は狭かつた。窓もなく、壁には青空の壁紙、部屋の中には小さな机といすだけ。

そこまで確認した時、彼はその椅子に誰かが座つていることが確認できた。

「……『ソクラ』……ですか？」

私はその声を聞き、「その通りでござります」と言つた。

「……外の様子はどうでしたか」

彼女、は優しい声で言つた。彼女の隣にはその姿にそつくりな絵もあった。

彼女は目が見えなかつた。それは私が初めてここに来た時からである。

なぜ見えなくなつたのかは解らない。ただ、彼女はずつとこの高層ビルにいたようである。しかし、なぜ彼女は捕虜にもならずここにいるのか？

それは前に私の上司に聞いたが、『我々が侵略したときにはすでに人間が滅んでいた』とのことであつた。まるでついさっきまでいたような生活感と真新しいビル群を遺して、先人たちはどうかへ消えていったのだ。未だにその話を聞いて私は信じられない。

「……何も変わりはありません」

私は、大丈夫、とモーションをとつて言った。見えるはずはないのに。そんなことは分かつているのに。

「全く変わりない一週間でしたよ？」

それを言うと「そうですか」とまたも優しい声で言った。

私はそれを言わるたび、胸が苦しくなった。いや、こんな私に苦しくなるほどの胸なんてあるのだろうか。

果たして、彼女は『その事実』を知っているのだろうか。いや、知らないだろう。

私は何も言わず、無言で部屋を出る。彼女を護る為に。

それが彼女をまもるための唯一の手段なのだから。

もしかしたら、私は彼女に恋をしていたのかもしれない。
人工物^{ロボット}と人間の禁じられた恋を。

了。

（後書き）

もともと残っていたデーター（1100字あまり）に少し書き下ろし部分を加えて投稿します。タイトルはあんま決めてなかったので単純なタイトルになりましたが、そこはご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3387ba/>

ロボットと少女

2012年1月8日20時48分発行